

小学生のキャリア意識と適応感の関連

徳岡 大・山縣麻央・淡野将太・新見直子・前田健一

Career awareness and self-perceptions of social adjustment in primary school children

Masaru Tokuoka, Mao Yamagata, Syota Tanno, Naoko Niimi, and Kenichi Maeda

本研究では、小学校高学年児童を対象に、キャリア意識4領域（人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定）の学年差と性差およびキャリア意識と適応感（自己肯定感、学習効力感、学校満足感）の関連について検討した。その結果、キャリア意識の4領域すべてにおいて5年生が6年生よりも高く、人間関係形成、情報活用、将来設計の3領域では女子が男子よりも高かった。また、キャリア意識の4領域はいずれも、適応感の3下位尺度すべてと有意な正の相関を示した。この結果から、キャリア教育によって児童のキャリア意識が高まれば、児童の適応感も向上することにつながる可能性が示唆された。

キーワード：キャリア意識、適応感、小学生

問題と目的

文部科学省（2004）によると、キャリア教育とは、「キャリア概念に基づいて児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」であり、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義されている。また、日本キャリア教育学会（2008）は、キャリア教育の特徴の一つとして個人の適性と職業や進路先との適合とともに、将来自立した社会人になるために不可欠な、社会や集団への適応に関わる指導を重視するという点を挙げている。現在、多くの学校が国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）の提示した4領域（人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定）の能力・態度に基づき、児童生徒の特徴や地域性等を考慮して、キャリア教育プログラムを立案、実践している。例えば、平成18年度における公立中学校の職場体験率は94.1%に達し、公立高等学校においても実施率は62.9%で、普通科の実施率も近年増加してきている（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2008）。

新見・前田（2009）は、各学校が公表している職場体験学習の報告書は、主に児童生徒の感想文等に基づいた質的な評価であることを指摘し、キャリア教育の効果を評価するためには量的な評価の必要性を主張している。そして、新見・前田（2009）ではキャリア意識を「キャリア発達にかかわる基礎的な意欲・態度・能力に対する個人の自己評価」と定義し、キャリア教育で重視されてい

る4領域の能力・態度を数量的に捉える「キャリア意識尺度」を開発した。

キャリア意識尺度を使用した研究では、児童生徒のキャリア意識が学校生活等への適応と正の関係にあることが見出されている。例えば、小・中・高等学校のすべての学校段階において、キャリア意識の4領域は、対人関係志向や学業に対する自己効力感と正の関連を示すことが明らかになっている(新見・前田, 2009)。また、前田・中條・木本・藤井・簗島・藤田・新見・松田(2008)は、中学生のキャリア意識、行動特徴(学習意欲、規律違反、社会性)および親の教育観(子どもの将来や教育に関する考え方や意見)を質問紙法によって調査した。その結果、中学生のキャリア意識の4領域はそれぞれ、親の教育観が学習意欲および社会性を重視している場合に高くなることを見出している。また、学習意欲が高く、規律違反しない中学生ほど情報活用、将来設計、意思決定のキャリア意識が高い関係にあることが示された。新見・前田(2008)は、新見(2008)で作成された中学生版キャリア意識尺度を用いて、中学生のキャリア意識と家族や友人に対するコミュニケーション頻度の関連を検討した。その結果、家族と多く話をする者は、家族とあまり話をしない者と比べてキャリア意識4領域が有意に高いこと、また友人と多く話をする者は、友人とあまり話をしない者よりも人間関係形成、情報活用、意思決定のキャリア意識が有意に高いことが示された。

以上の先行研究では中学生を対象にしてキャリア意識と適応等との関連を検討しているが、小学生でも同様の関連がある否かを検討した研究はほとんど報告されていない。そこで、本研究では小学校高学年児童のキャリア意識を測定し、学年差と性差を検討するとともに、キャリア意識と適応感との関連を明らかにすることを目的とする。キャリア教育は、小・中・高等学校を通じて組織的・系統的に計画していくことが必要とされている(国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2008)が、そもそも小学生のキャリア意識を測定した研究は少ないのが現状である。Hartung, Porfeli, & Vondracek(2005)は12年生(日本における高校3年生)までのキャリア発達研究をレビューする中で、キャリア成熟度が年齢に伴って発達することを指摘している。この指摘を考慮すると、小学校高学年児童のキャリア意識も年齢に伴って発達すると予想される。

方法

対象者 広島県内の同一校区にある公立小学校2校に通う小学5,6年生333名のうち、欠損値のない小学5年生163名(男子84名,女子79名)と小学6年生155名(男子74名,女子81名)を分析対象とした。

調査時期 2010年10月に質問紙調査を実施した。

手続き 調査協力校の校長の承諾を得た後、学校を通じて各クラス担任が調査を実施した。調査はクラス単位で実施された。回答にあたって、回答しづらい項目がある場合は、無理に回答しなくてよいことを調査用紙の表紙に印刷して説明した。

調査内容 調査用紙は、個人属性(学年、性別、年齢)を尋ねる質問と以下の2つの質問群で構成した。

(1) キャリア意識尺度:新見・前田(2009)が小中高校生を対象に作成したキャリア意識尺度4領域58項目のうち、小学生を対象にした31項目(人間関係形成9項目、情報活用8項目、将来設

計 6 項目、意思決定 8 項目) を使用した。各項目内容に対してそう思う程度を 6 段階 (1: まったくそう思わない, 2: あまりそう思わない, 3: どちらかというと思わない, 4: どちらかというと思おう, 5: わりとそう思う, 6: とてもそう思う) で評定させた。

(2) 適応感尺度: 普段の生活全般における適応感について、学校、学習、家庭などを仮定して 16 項目 (「学校は楽しい」、「授業で出された問題や課題をうまくやることができると思う」、「家の人は、私のことをよく理解してくれていると思う」) を作成した。各項目内容があてはまると思う程度を 5 段階 (1: まったくあてはまらない, 2: あまりあてはまらない, 3: どちらでもない, 4: わりとあてはまる, 5: とてもよくあてはまる) で評定させた。

結果

キャリア意識の 4 領域と適応感の得点化 新見・前田 (2009) と同様に、キャリア意識尺度の 4 領域別に、1 主成分を仮定した主成分分析を行った。主成分負荷量が .35 未満の項目を除外した結果、キャリア意識尺度は、人間関係形成 7 項目、情報活用 7 項目、将来設計 6 項目、意思決定 5 項目の計 25 項目となった。最終的な各領域の主成分分析の結果と α 係数を Table 1 に示す。各領域の項目数が異なるため、領域別に 1 項目あたりの平均値を算出し、それを各領域の尺度得点として分析に使用した。尺度全体の α 係数は .87 と十分な値が得られた。

次に、適応感尺度の 16 項目に対して主因子法 promax 回転による因子分析を行ったところ、1 項目が複数の因子に .40 以上の因子負荷量を示したので、この 1 項目を除外し、再度同様の因子分析を行った。その結果、3 因子が抽出された。第 1 因子は、「今の自分が好きだと思う」「今の自分は幸せなほうだと思う」など自分に対するポジティブな見方を表す項目で構成されたため、「自己肯定感」と命名した。第 2 因子は、「授業で出された問題や課題をうまくやることができると思う」「これから先、授業で教えられる内容を、理解していくことができると思う」など学習に対する効力感を表す項目で構成されたため、「学習効力感」と命名した。第 3 因子は、「学校は楽しい」「学校がいやなので、授業が終わったらすぐに帰りたい」など学校に対する満足感を表す項目で構成されたため、「学校満足感」と命名した。因子分析の結果および各因子の α 係数を Table 2 に示す。各因子別に 1 項目あたりの平均値を算出して、それぞれを各下位尺度得点として分析に使用した。尺度全体の α 係数は .87 と十分な値が得られた。

キャリア意識の学年差、性差の検討 キャリア意識の 4 領域それぞれにおける学年差および性差を検討するため、2 (学年: 5 年生, 6 年生) \times 2 (性別: 男子, 女子) の 2 要因分散分析を行った (Table 3)。その結果、人間関係形成においては、学年の主効果 ($F(1, 314) = 5.60, p < .05$) および性別の主効果 ($F(1, 314) = 15.53, p < .001$) が有意となり、5 年生が 6 年生よりも、女子が男子よりも有意に高かった。情報活用においては、学年の主効果 ($F(1, 314) = 3.97, p < .05$) および性別の主効果 ($F(1, 314) = 17.76, p < .001$) が有意となり、5 年生が 6 年生よりも、女子が男子よりも有意に高かった。将来設計においては、学年の主効果 ($F(1, 314) = 7.27, p < .01$) および性別の主効果 ($F(1, 314) = 10.49, p < .001$) が有意となり、5 年生が 6 年生よりも、女子が男子よりも有意に高かった。意思決定においては、学年の主効果が有意 ($F(1, 314) = 6.42, p < .05$) となり、5 年生が 6 年生よりも有意に高

Table 1 キャリア意識尺度に関する主成分分析の結果

人間関係形成 $\alpha = .70$	
友だちの気持ちを大切にすることができると思う	.76
友だちがこまったときには、助けることができると思う	.74
友だちの良くないところは注意すべきだと思う	.63
自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う	.58
友だちの良いところをもっと知りたいと思う	.57
自分がいやなことは、友だちに、はっきり言うべきだと思う	.53
自分が話したいことがあると、相手の話をあまり聞かないと思う*	.45
	寄与率 37.90
情報活用 $\alpha = .61$	
いろいろな体験をすることが将来の仕事に役立つと思う	.73
働いている人はどのようにして、その仕事についたのかを知りたいと思う	.69
何かを決めるときには、情報はできるだけ多いほうがよいと思う	.56
中学校ではどんなことをするのかを知りたいと思う	.50
みんなで決めた仕事でも、したくないことはしないと思う	.49
わからないことは、先生や友達に聞くことができると思う	.47
調べたことをうまくまとめたり整理できないほうだと思う	.38
	寄与率 31.11
将来設計 $\alpha = .68$	
計画や時間を決めて勉強したいと思う	.72
計画どおりに進まないことが多いので、計画を立てても意味がないと思う*	.70
だらだらとテレビをないようにしようと思う	.65
自分の未来は明るいと思う	.57
人から頼まれたことでも、うまくできないとやめてしまうと思う*	.53
子どもは、将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う	.53
	寄与率 38.78
意思決定 $\alpha = .62$	
失敗しても、あきらめずに、うまくいくまでがんばろうと思う	.82
すぐにできなくても、できるまでがんばろうと思う	.81
友だちとけんかしても、うまく仲直りができると思う	.62
みんなと意見が違っても、自分の意見を言うことができると思う	.48
遊びに行く前に、勉強や宿題をすませるほうがよいと思う	.44
	37.81

*は、逆転項目を示す。

かった。

キャリア意識と適応感の関連 キャリア意識4領域と適応感3下位尺度との関連を検討するために、学年別に人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定、自己肯定感、学習効力感、および学校満足感の7つの得点間でPearsonの相関係数を算出した(Table 4, 5)。その結果、どちらの学年に

においても、キャリア意識の4領域はいずれも3つの適応感下位尺度との間に有意な正の相関を示した。

Table 2 適応感尺度に関する因子分析の結果 (promax回転)

	F1	F2	F3	
自己肯定感 $\alpha = .85$				
今の自分が好きだと思う	.74	-.12	-.03	
今の自分は幸せなほうだと思う	.67	-.03	.02	
私は、学校の友だちから好かれていると思う	.67	-.05	.06	
自分は、家の人から愛されていると思う	.67	-.03	.00	
私のことを心配してくれる友だちは、多いと思う	.62	.00	.08	
家の人、私のことをよく理解してくれていると思う	.62	.11	-.02	
将来、自分の興味や関心のある仕事につけると思う	.56	.11	-.07	
将来の仕事では、自分の能力や才能をいかせると思う	.50	.26	-.10	
学習効力感 $\alpha = .79$				
授業で出された問題や課題をうまくやることができると思う	-.08	.83	.10	
これから先、授業で教えられる内容を、理解していくことができると思う	-.10	.79	.03	
勉強の仕方が上手だと思う	.07	.66	-.15	
やる気になれば、勉強でいい成績をとることができると思う	.13	.51	.00	
学校満足感 $\alpha = .73$				
学校がいやなので、授業が終わったらすぐに帰りたい*	-.03	-.08	.88	
学校へ行きたくないと思うことがある*	-.05	.00	.64	
学校は楽しい	.21	.17	.52	
	F1	F2	F3	
	F1	-.	.63	.40
	F2	-.	-.	.34

*は、逆転項目を示す。

Table 3 学年別・性別の平均値 (M)、標準偏差 (SD) および分散分析結果

	男				女				F		
	5年		6年		5年		6年		主効果		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	学年	性別	交互作用
キャリア意識											
人間関係形成	4.38	0.82	4.10	0.82	4.64	0.61	4.52	0.71	5.60 *	15.53 ***	0.92
情報活用	4.44	0.76	4.31	0.87	4.82	0.55	4.63	0.73	3.97 *	17.76 ***	0.12
将来設計	4.20	0.89	3.99	0.98	4.59	0.77	4.26	0.90	7.27 **	10.49 ***	0.32
意思決定	4.40	0.87	4.01	0.93	4.36	0.84	4.25	0.85	6.42 *	1.03	1.95

* $p < .05$, ** $p < .01$ *** $p < .001$.

Table 4 5年生のキャリア意識の各領域と適応感の相関($n = 163$)

	キャリア意識				適応感		
	人間関係形成	情報活用	将来設計	意思決定	自己肯定感	学習効力感	学校満足感
キャリア意識							
人間関係形成	-	.51 ***	.52 ***	.45 ***	.42 ***	.35 ***	.42 ***
情報活用		-	.47 ***	.39 ***	.42 ***	.46 ***	.40 ***
将来設計			-	.56 ***	.40 ***	.49 ***	.45 ***
意思決定				-	.52 ***	.45 ***	.26 ***
適応感							
自己肯定感					-	.41 ***	.34 ***
学習効力感						-	.29 ***
学校満足感							-

*** $p < .001$.Table 5 6年生のキャリア意識の各領域と適応感の相関($n = 155$)

	キャリア意識				適応感		
	人間関係形成	情報活用	将来設計	意思決定	自己肯定感	学習効力感	学校満足感
キャリア意識							
人間関係形成	-	.63 ***	.54 ***	.59 ***	.44 ***	.42 ***	.24 **
情報活用		-	.64 ***	.56 ***	.44 ***	.49 ***	.28 ***
将来設計			-	.67 ***	.52 ***	.64 ***	.35 ***
意思決定				-	.45 ***	.49 ***	.22 **
適応感							
自己肯定感					-	.63 ***	.41 ***
学習効力感						-	.33 ***
学校満足感							-

** $p < .01$, *** $p < .001$.

考察

本研究の目的は、小学校高学年におけるキャリア意識の学年差および性差を検討し、キャリア意識と適応感との関連を明らかにすることであった。

まず学年差については、キャリア意識の4領域とも小学5年生が小学6年生よりも有意に高かった。この結果は予想と異なり、キャリア意識の発達傾向に反する結果であった。このような学年差が見られた理由については、いくつかの可能性が考えられる。その第1は、桜井・高野(1985)の研究と同様に、本研究のキャリア意識4領域も小学生から中学生にかけて低下するのが一般的な発達傾向であるという可能性である。桜井・高野(1985)は、学習場面に対する内発的動機づけの達成下位尺度と挑戦下位尺度において、小学2年生から中学1年生までの変化に対して直線的成分の傾向分析(linear trend analysis)を行った結果、単調減少傾向が有意であることを見出した。達成下位尺度は教師に頼らず問題に取り組む傾向を、挑戦下位尺度は困難な問題に挑戦する傾向を測定するものであった。本研究のキャリア意識は自分から積極的に人間関係を築き、必要な情報を収集し、

自分の将来や進路について計画したり、意思決定をしたりする多様な側面で自分の能力・意欲・態度を自己評価することを求めている。キャリアを選択したり決定するという課題は、正解のない課題であるので、普段の授業やテストで正答を求められることが多い児童にとって、難しい課題であったと考えられる。児童にとって困難な課題に挑戦するという意味では、桜井・高野（1985）と本研究には共通する側面があり、その結果として本研究でも一般的な発達傾向に反する結果が見られたのではないかと考えられる。

第2は、中学校進学を控えた小学6年生が小学5年生よりも、キャリア意識の質問項目に対して現実的に回答した結果、小学5年生よりも得点が低くなったという可能性である。子どもの職業興味は、年齢発達に伴って空想志向から現実志向へと変化することが報告されている（Hurtang et al., 2005）。小学6年生は中学校進学を控えているので、中学校ではどのようなことがしたいのかなどについて具体的に考える機会が増え、キャリア選択・決定の問題をより現実的に考えるようになった。その結果、小学6年生はキャリア選択・決定の難しい問題にそれまで積極的に取り組んでこなかったと実感し、本研究のキャリア意識について小学5年生よりも低く評定したのかもしれない。いずれにしても、本研究では小学5年生と小学6年生だけを対象にしているため、中学生も含めて幅広い学年を対象に再調査を実施し、一般的な発達傾向に反する学年差がどの程度見られるのかを詳細に検討していく必要がある。

次に、性差ではキャリア意識の人間関係形成、情報活用、将来設計の3領域において女子が男子よりも有意に高かった。性差についても2つの可能性が考えられる。第1は女子が男子よりも高く評定する傾向は、一般的な性差を反映する結果であるという可能性である。Greemberger, Campbell, Sorensen, & O'Connor（1971）は、自尊感情、変化への開放性、自立性、アイデンティティ、社会的耐性の5因子から構成される成熟度尺度得点において、5年生の女子が男子よりも高いことを見出している。文部科学省（2004）によると、キャリア教育においては「生きる力」の育成の観点から、豊かな人間性や社会性、学ぶことや働くことへの関心や意欲、進んで課題を見つけ解決していく力とともに、集団生活に必要な規範マナー、人間関係を築く力やコミュニケーション能力など、幅広い能力の発達を支援していくことを、これまで以上に重視していく必要があるとしている。このようなキャリア教育の効果を評価するために開発されたキャリア意識尺度（新見・前田, 2009）は、幅広い能力の発達を捉える尺度であるため、Greemberger et al.（1971）で使用された成熟度尺度と同様に、女子のキャリア意識が男子よりも高くなるのが一般的な発達傾向なのかもしれない。

第2は、社会的望ましさに基づく反応の性差を反映している可能性である。桜井（1984）は、小学生の社会的望ましさに基づく反応において女子が男子よりも高いことを報告している。本研究のキャリア意識は「キャリア発達にかかわる基礎的な意欲・態度・能力に対する個人の自己評価」（新見・前田, 2009）とされるが、項目の中には社会的に望ましい態度に関する意識を問う項目が比較的多く含まれている。このように社会的望ましさに基づく反応に性差があり、それを反映した結果として女子のキャリア意識が男子よりも高くなった可能性も示唆される。いずれにしても、キャリア意識の性差は本研究だけでなく、新見・前田（2009）でも見出されており、比較的一貫した結果であることは確かである。

さて、小学5年生と小学6年生の両学年ともに、キャリア意識4領域と適応感3下位尺度の間には有意な正相関が確認された。本研究の適応感は、自己肯定感、学習効力感、学校満足感の3因子から構成されていた。これらの得点が高いことは、自己を肯定的に捉えていること、勉強に対する自信があること、学校生活にある程度満足できていると児童が感じていることを意味する。「キャリア発達には、すべての学習活動等が影響するため、キャリア教育は学校のすべての教育活動を通して推進しなければならない」（文部科学省, 2004）と指摘されている。本研究のキャリア意識が学校における広範囲な教育活動を通して形成されるとともに、教育活動の多様な側面を反映していると考えれば、本研究のキャリア意識が3つの適応感と関連することも十分に理解できる。新見・前田（2008）は、中学生のキャリア意識が学習意欲や規律違反と関連することを実証しているが、学習意欲や規律違反は、それぞれ本研究の学習効力感や学校満足感とも一部分は重複する可能性が高い。新見・前田（2008）の中学生の結果と本研究の小学生の結果を総合すると、キャリア意識は学校における学習場面に限らず、広く学校適応状態全般とも正の関連をすると考えられる。今後は、学校適応感全般を幅広くとらえ、キャリア意識との関連を発達的に検討していく研究が求められる。

引用文献

- Greemberger, E., Campbell, P., Sorensen, A., & O'Connor, J. (1971). *Toward the measurement of psychosocial maturity*. Center for Social Organization of Schools Report, Johns Hopkins U. No. 1101971, 38.
- Hartung, P. J., Porfeli, E. J., & Vondracek, F. W. (2005). Child vocational development: A review and consideration. *Journal of Vocational Behavior*, 66, 385 - 419.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002). 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査報告書）〈<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf>〉（2011年2月17日）
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2008). キャリア教育体験活動事例集（第1分冊）—家庭や地域との連携・協力—〔解説部分抜粋〕, 159 - 176.
- 前田健一・中條和光・木本一成・藤井志保・簗島 隆・藤田敬子・新見直子・松田由希子 (2008). 中学校におけるキャリア教育とキャリア意識の形成 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 36, 359 - 365.
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒の一人一人の勤労観、職業観を育てるために— 〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm〉（2011年2月17日）
- 文部科学省 (2006). 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き—児童生徒の一人一人の勤労観、職業観を育てるために— 〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/_icsFiles/afieldfile/2010/03/18/1251171_001.pdf〉（2011年2月18日）
- 日本キャリア教育学会（編）(2008). キャリア教育概説 東洋館出版社.
- 新見直子 (2008). 中学生版キャリア意識尺度の開発 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 57,

225 - 233.

新見直子・前田健一 (2008). 中学生のキャリア意識と家族・友人に対するコミュニケーション内容の関連 広島大学心理学研究, **8**, 67 - 75.

新見直子・前田健一 (2009). 小中高校生を対象にしたキャリア意識尺度の作成 キャリア教育研究, **27**, 43 - 55.

桜井茂男 (1984). 児童用社会的望ましさ測定尺度 (SDSC) の作成 教育心理学研究, **4**, 310 - 313.

桜井茂男・高野清純 (1985). 内発的—外発的動機づけ測定尺度の開発 筑波大学心理学研究, **7**, 43 - 54.